

と く
徳

ほ う
朋

しんらんしょうにん で あ
親鸞聖人が出遇った世界

ましろ よしまろ
真城 義麿

ましろ よしまろ

1953－現在

愛媛県出身。元大谷中・高等学校校長、元真宗大谷派学校連合会長、真宗大谷派普照寺住職

それまでの親鸞聖人が生きていた世界は、必ず「私が」が主語となるような世界でした。私が苦悩を自覚し、私が決意し、私が学び、私が修行し、私が点検して、私がさらに努力する。しかも、この「私が」というのは、「考える私が」です。人間の知恵をもって考えることのできる「私が」ということです。親鸞聖人は成果主義の中で努力の限界を超えようとがんばってきたわけです。「私ががんばって仏さまの境地へ向かっていく」という世界です。しかし、法然上人という人に遇ってみると、全く違っていた。それは何かというと、仏さまの方から私のところへ願いやはたらきをかけてくださり、仏さまの力で私が認められ、そして救われる。仏さまの方から私が尊敬されている。そういうことを教えられるわけです。つまり、主語は「仏さま」であって、全く逆さまなのです。もう、機能がどうか、成果がどうかではないのです。私の存在そのものが、いのちまるごと無条件に、仏さまの方から認めてもらっていたという事です。私が私として生まれて、この私として生きているという、そのこと自体を「あなたは尊いよ」と仏さまからいわれているのです。私たちの中に、必要なく生まれた人は一人もいない。今生きている人の中に、価値のない人は一人もいない。能力があろうがなかろうが、

健康であろうがなかろうが、年老いていようがいまいが、どの人のどんな人生のどの瞬間も尊とうといという事です。そういう「存在への安心」ですね。たとえ寝たきりの状態になっても、それは「できる」という価値基準でいえば起きられないわけですから値打ちは低いかもしれませんが、仏さまの方から見るとそうではないのです。そのことを親鸞聖人しんらんしょうにんは、どの人も仏さまから肯定こうていされているのだと教えて下さいます。仏さまが「あなたがどんな状態になっても、絶対に見捨てない」と約束されている訳ですから、そのことが大きな安心感としてある訳です。ですから「私が」という立場を否定するわけではないのですが、それよりも以前に「仏さまが」の方が先だという事です。どの人も尊とうといいのちを生きている。そういう根本のところ、まず存在そのものを無条件でまるごと認めたいうで、「尊とうといいのちを生きるあなたの具体的生活はそれでいいのか」と私たちに問うのです。



(『安心してがんばれる世界を』)

私たちはそれぞれに価値基準を持っていますが、その価値基準を超えて全ての存在が絶対的に認められているということに気付けば、「私はこの私で良かった」という事に落ち着けるのだと思います。(哲弘 拝)



この「徳朋」とくほうは仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。